

年中行事故實考

四

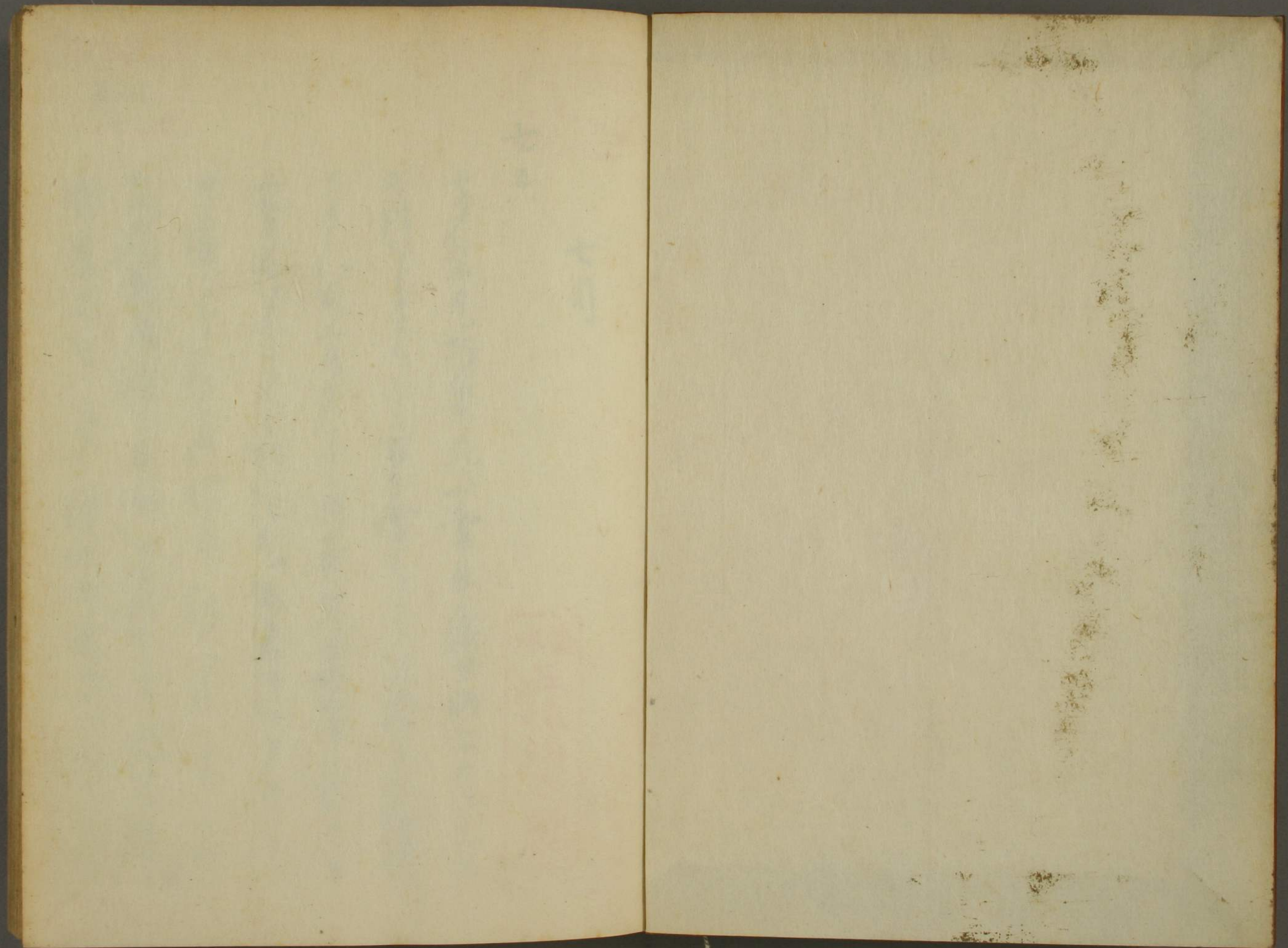
76

3083

4

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25







76  
3083  
巻 4

七月

七  
日

去  
水  
五  
味  
均  
平  
蔵

七夕祭乞巧集らる幸牛織女の二星玉の  
の川とて〜〜〜 喜舎と〜〜〜 和唐  
のいたち実多〜 舟車と女の草乳葉と  
二宮ふまう〜 巧乞あるつら〜  
中善〜〜〜 ンつまの代り〜  
又選謝惠連の牛女と後せし〜  
齊諧記と〜 海の付武〜



起りのよきおのゝゑ系雜記の傳言  
帝戚夫人の七夕宴とかさしき  
のまは清らり少あまらるるや大抵傳  
言の民の風俗ふゆりつとと  
くは年多し後人改考の誤り  
匡ふし一変ししをなほ記  
西京雜記もれ晋人のいふく右と  
漢人の撰ふ托すおろしき信  
孟子曰盡信書不如無書と

千載の確論  
齊諧記曰桂陽武丁有仙道常在  
人間忽謂其弟曰七月七日織女渡河  
諸仙悉還宮吾向已被口不得停與  
爾別矣弟問織女何事渡河兄何當  
還荅曰織女暫詣牽牛吾去後三千  
年當還耳明日失武丁所在世人至  
今猶云七月七日織女嫁牽牛  
西京雜記曰七月七日臨百子池作



闐樂<sup>ヲ</sup>樂畢<sup>ニ</sup>以五色縷相羈謂為相連  
愛又曰漢絲女常以七月七日穿七孔  
佩<sup>ラ</sup>於開襟樓俱以習之

我邦<sup>出</sup>氏神<sup>通</sup>者流の一説一<sup>ト</sup>古<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>畢<sup>ノ</sup>  
ふり起<sup>ル</sup>わ<sup>ル</sup>ふ<sup>ル</sup>附<sup>合</sup>身<sup>ニ</sup>一<sup>ト</sup>年<sup>ノ</sup>一<sup>ト</sup>  
し<sup>テ</sup>論<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>乃<sup>チ</sup>す<sup>中</sup>年<sup>ノ</sup>身<sup>ノ</sup>も<sup>レ</sup>後<sup>後</sup>  
物<sup>ト</sup>し<sup>テ</sup>或<sup>ハ</sup>漢<sup>ノ</sup>張<sup>騫</sup>河<sup>原</sup>と<sup>病</sup>  
や<sup>ト</sup>附<sup>合</sup>し<sup>テ</sup>浮<sup>植</sup>ふ<sup>ル</sup>一<sup>ト</sup>王<sup>所</sup>の<sup>ま</sup>  
印<sup>シ</sup>し<sup>テ</sup>或<sup>ハ</sup>漢<sup>ノ</sup>の<sup>所</sup>人<sup>ノ</sup>あり<sup>浮</sup>植<sup>ル</sup>り

き<sup>テ</sup>一<sup>ト</sup>の<sup>ま</sup>ひ<sup>り</sup>し<sup>テ</sup>鐵<sup>女</sup>ふ<sup>る</sup>支<sup>機</sup>石<sup>と</sup>  
得<sup>ル</sup>て<sup>帰</sup>る<sup>ル</sup>持<sup>志</sup>或<sup>ハ</sup>鳥<sup>籠</sup>得<sup>ル</sup>て<sup>か</sup>して  
鐵<sup>女</sup>の<sup>所</sup>に<sup>一</sup>淮<sup>南</sup>子<sup>の</sup>詩<sup>に</sup>ま<sup>り</sup>て<sup>か</sup>る<sup>る</sup>  
う<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>托<sup>お</sup>比<sup>比</sup>真<sup>の</sup>ま<sup>り</sup>し<sup>テ</sup>實<sup>を</sup>  
ふ<sup>る</sup>る<sup>る</sup>可<sup>し</sup>

一 禁<sup>中</sup>を<sup>巧</sup>真<sup>上</sup>古<sup>の</sup>式<sup>ハ</sup>ら<sup>年</sup>根<sup>原</sup>雲<sup>邊</sup>物<sup>と</sup>  
ゆ<sup>く</sup>後<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>を<sup>成</sup>と<sup>機</sup>の<sup>ま</sup>り<sup>七</sup>夜<sup>に</sup>  
羽<sup>子</sup>向<sup>向</sup>し<sup>七</sup>對<sup>と</sup>向<sup>く</sup>ら<sup>し</sup>和<sup>方</sup>れ  
即<sup>令</sup>も<sup>向</sup>の<sup>中</sup>に<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>水<sup>清</sup>詩<sup>に</sup>乃



遊ユと云クして傳ツをシてシ

公系根源曰先七シ多クのハ為ル人ノ少シ個ノ友ト  
〜のハ武ヲ取リ入ル〜九ノ巧ヲ尊ル〜法ノ敷ク  
庭ノ札ハ所トなリてハ燈ノ臺ヲ奉ル〜  
灯ノあリ札ノ多ク〜のハおも〜  
〜おも〜たリ〜あリ〜立止〜  
火ノ〜  
少シ〜  
あリ〜  
江家次第曰當日掃部寮鋪葉ヲ於テ清涼

秘シ〜  
〜  
江家次第曰當日掃部寮鋪葉ヲ於テ清涼

殿東庭其上鋪長筵ヲ内藏寮持雜ヲ呂ヲ奠  
物ヲ候ス於テ仙ノ華ノ門ノ外ニ雜シ色ヲ以下傳取供フ之ヲ朱ノ漆  
高机四脚立ヲ筵上其東南机南妻居菓子ヲ等ヲ

- 一杯梨東一 一杯桃 一杯大角 一杯大
- 一杯熟 一杯茄 一杯薄或説加テ鯛ヲ

然而違フ式ノ與テ人ノ式ノ也ト



北妻居酒杯一口以上並尾張青次有朱漆華盤

西南梶同上

西北机居香爐一口在西納殿百和香四兩盛之居朱彩

華盤一口在東盛蓮房十房或五房置椒葉一枚柿金針七銀

七件針別有七孔以五色絲瀆合貫之

東北机同上但無針

自御所申下第一張置東北西北等机上

北妻垂喜十五年例用和琴

立黑漆燈臺九本於件机四方四角中央

加打敷謂之九枝燈

內藏寮供御燈明同上

件中央燈明有兩說或向北或向御前

召內侍所粉五合散机上及筵上立御

倚子於庭中或無為覽二星會合也

令殿上侍臣結番窺之

藏人取御捧鞋視候鋪座於河竹臺東為

雜色以下視候座下或可候南廊壁下

或有御游御作文等事事了給祿及曉



更撤之事了下格子

諫闇時猶祭天曆八

内裏穢時猶祭應和二

雨濕時設於仁壽殿西庇下

行事藏人終夜束帶監臨候小板敷雜  
色以下亦終迎檢知之束帶

雲圖抄曰供物茄子二碟 批實一碟 梨子  
一碟 土器大豆一碟 大角一碟 鯛一碟 蛇一碟  
右の……二物は……

知



中善とて瓜を彫る如く飾る香を  
供し竹竿を五色の糸でつむひ又五色の  
糸で七孔の針をうむる由今人家  
の以女の穿縫母ふが書り竹竿  
糸をけ瓜菓を飾るは是風也

月令廣義曰以瓜雕刻成蒼様為花瓜荊  
楚歲時記曰是夕人家婦女結綵縷穿七  
孔針或以金銀鑰為針陳瓜果於庭中以  
乞巧有喜子綢於瓜上則以為符應

白氏文集曰憶得少年長乞巧スル竹竿頭上  
願緣多

開元天寶遺事曰宮中以錦結成樓殿高  
百尺上可以坐數十人陳以瓜果酒炙設  
坐具以祀牛女二星妃嬪各執九孔針五  
色線向月穿之透者為得巧之候勳清高  
之曲宴樂達旦士民之家皆效之  
乞巧糸

凡河月初恒  
七夕又かほる糸のあそび



年のくまのくまや

中身とくま黄蠟とくま小児の形と此  
玉盤と水と活くまと活守摩くま候くま  
くま文化とくまの婦人くまと新くまのくまり  
くまのくま薛くま候くま宮河くま水拍浪くま登くま再くま化  
くまのくまのくまハくまとくま又くま梳くまとくま水くまのくま形くまと  
仰くまのくまくくまくくま又くまハくま小くま板くまのくまくくまちくまくくまとくまとくまとくま  
とくま河くま苗くまとくまとくまのくま小くま茅くまをくまたくまたくまかくまし  
花田くまのくま風景くまとくま和くまとくま序くまとくまのくま玩くまとくま寸

あまくまとくま穀くま板くまとくまのくま遊くま代くまとくまのくま児くま女くまのくま玩くまとくま  
人くま形くまのくまあくまとくまとくまのくまけくまとくまのくま糸くまとくまとくま  
風くまのくまとくまとくまとくま

月令廣義曰小塑土偶くま悉くま以くま雕木くま絲くま裝くま欄  
座くま或くま用くま紅くま碧くま紗くま籠くま或くま飾くま以くま金くま珠くま牙くま翠くま石くま  
摩くま喉くま羅くま有くま一くま對くま值くま數くま千くま者くま

又曰以黃蠟くま做くま為くま鳧くま雁くま鴛くま鴦くま鴻くま鴨くま龜くま魚くま  
之類くま絲くま画くま金くま縷くま次くま千くま盆くま盞くま以くま玩くま謂くま之くま水

上浮くま



又曰以小板上傳土施種粟令生共苗置  
小茅屋花木作田舎家風景細小人  
物村落之態名較板

梶の葉あまの葉

なほあまの葉あまの葉あまの葉  
久しき風俗を新古今集後成

天の河をさしあまのちあまのち  
あまのちあまのちあまのち

一説一梶の葉を楳と書く候と傳る

上古の葉あまの葉あまの葉  
質素の風を傳るあまのちあまのち  
あまのちあまのちあまのち

茅の葉あまの葉

あまのちあまのちあまのちあまのち  
あまのちあまのちあまのちあまのち  
あまのちあまのちあまのちあまのち  
あまのちあまのちあまのちあまのち



七夕の方とありて 何事ありし  
素餅 素麴 書に信あり

七夕の素餅と食すことを 瘧疾と患す  
とありて 何事ありしと未  
考 祝詞中 古くは 風俗を 信言り  
十節記に 川と云ふ 幸氏の子 七月七日  
死す 其神 瘧と病し 是れ 母日 素餅  
とありて 母日 素餅と云ふ 是れ 素餅と  
祝詞に 子と 母日の 信あり

謝鞠

素餅と云ふ 母日 素餅の 祝詞の  
會の 素餅と云ふ 母日 素餅の  
信あり 母日 素餅の 祝詞の  
信あり 母日 素餅の 祝詞の  
信あり 母日 素餅の 祝詞の  
信あり 母日 素餅の 祝詞の  
信あり 母日 素餅の 祝詞の  
信あり 母日 素餅の 祝詞の  
信あり 母日 素餅の 祝詞の

七夕の夜とある故 事  
中 素餅と云ふ 母日 素餅の 祝詞の 信あり



世傳亦不出之... 有年... 出... の... 七... 今... 寺... 曝... 曝... 曝

竹林七賢傳曰阮咸字仲容籍兄子也諸阮前世内足於財唯咸生尚道好酒而貧舊俗七月七日法當曬衣諸阮庭中爛然莫非

綵錦咸時總角乃豎長竿標大布擯鼻視曝於庭中曰未能免俗聊復爾耳世說曰郝隆七月七日見鄰人皆曝曬衣物隆乃仰臥曝腹於庭曰我曝腹中

書

拾遺集... 七月七日見鄰人皆曝曬衣物隆乃仰臥曝腹於庭曰我曝腹中

七夕の事











弗思甚矣

信亦不<sub>レ</sub>生靈柳<sub>ニ</sub>蓮の糸<sub>ヲ</sub>交<sub>テ</sub>新穀  
印<sub>ヲ</sub>備<sub>ヘ</sub>多<sub>ク</sub>内<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>毒<sub>ヲ</sub>干<sub>キ</sub>茶<sub>ヲ</sub>盆<sub>ニ</sub>水<sub>ヲ</sub>送  
風<sub>ヲ</sub>吹<sub>キ</sub>伊<sub>ノ</sub>魚<sub>ノ</sub>式<sub>ヲ</sub>江<sub>ノ</sub>水<sub>ヲ</sub>次<sub>ヲ</sub>水<sub>ヲ</sub>ト<sub>シ</sub>ス  
き<sub>ニ</sub>は<sub>レ</sub>禁<sub>中</sub>ト<sub>シ</sub>テ<sub>モ</sub>シ<sub>テ</sub>の<sub>ハ</sub>る<sub>ハ</sub>な<sub>ら</sub>ば  
叶<sub>葉</sub>と<sub>シ</sub>傳<sub>ス</sub>る<sub>ハ</sub>ま<sub>今</sub>昔<sub>ノ</sub>物<sub>ヲ</sub>送<sub>ル</sub>も<sub>ト</sub>ス  
く<sub>ハ</sub>月<sub>今</sub>廣<sub>義</sub>も<sub>不</sub>存<sub>ス</sub>と<sub>目</sub>く<sub>傳</sub>り  
供<sub>ト</sub>生<sub>ス</sub>く<sub>ハ</sub>な<sub>ら</sub>ば<sub>ハ</sub>何<sub>レ</sub>の<sub>行</sub>り  
く<sub>ハ</sub>水<sub>ヲ</sub>傳<sub>ス</sub>る<sub>ハ</sub>風<sub>ヲ</sub>傳<sub>ス</sub>る<sub>ハ</sub>

月令廣義曰今世七月十五日營僧尼  
供謂之干蘭齊一本目連後代廣為華  
飾乃至割木削竹極工巧也今人第  
以竹為圓架加其首以荷葉中貯龍  
饌果食陳自連救母画像ヲ祭祀之失  
之遠矣

泥<sub>業</sub>不<sub>干</sub>茶<sub>盆</sub>ハ<sub>供</sub>和<sub>漢</sub>ト<sub>ハ</sub>ハ<sub>リ</sub>ク<sub>ハ</sub>  
久<sub>シ</sub>ク<sub>ハ</sub>風<sub>ヲ</sub>傳<sub>ス</sub>る<sub>ハ</sub>ぬ<sub>ル</sub>雜<sub>怨</sub>の<sub>行</sub>り<sub>ト</sub>モ  
父母<sub>ト</sub>傳<sub>ス</sub>る<sub>ハ</sub>俄<sub>鬼</sub>ト<sub>シ</sub>テ<sub>ス</sub>石<sub>敬</sub>の<sub>行</sub>り







事のついでにそのあつたふと  
人情の常のめとていふ意あり  
一説には中元の火焼と踊りあはす  
初月中元の夜燈と傳ふは踊りあはす  
ふせぬやまは九陌の月し  
踊りあはすは遊のあはす  
かたは風俗のあはす

燈籠

林の中へ十丁のふり十丁のふり

立燈籠人まゝとていふは  
法入ふとてと十丁のふりの燈籠  
しりあはすのあはすは一年中  
行事あはすはとていふは  
記の中へは燈籠のあはすは  
院宮のあはすはとていふは  
四月記のあはすはとていふは  
年七月のあはすはとていふは  
あはすはとていふは



明月記寬喜二年七月十四日近年氏  
家今夜立長竿其末插付下如燈樓物張  
紙舉灯遠近有之云々

案云河内少のあり燈籠は是の  
寺院にありてあり

五雜俎曰宋初上中下元皆張燈如  
上元之例至淳化間始罷之

熙朝樂事曰七月十五日僧家建千蘭  
盆會放燈西湖及瑤上河中謂之照冥

劉邦彥詩云金蓮萬朵漾中流疑是  
潘妃夜出游光射魚龍離窟宅影搖  
鴻雁亂江洲凌波未必通銀浦趁月  
偏憐近絲舟忽憶少年清淚處滿身  
風露獨凭樓

廿四日

信々々々々々々々々々々々々々々々々々  
京都々々々々々々々々々々々々々々々々  
多々々々々々々々々々々々々々々々々々



波千とる波とつらつた物と因入傳  
し一廿四とる比苑のきんりし法  
しと小寺院とまつる事とる中善と  
七月二十日比苑菩薩の辰とるし  
月令廣義とるし和道とるし  
年とるし

相撲

古へ相撲とるしお撲のそととるし  
今とるし一氏信お撲とるし秋

さしとるしとるし

公事根源曰お撲とるし法國の供物と  
とるしあつた七月お撲のそととるし  
天子の御覽とるしとるしとるしとるし  
あつた御勅とるしとるしとるしとるし  
とるしとるしとるしとるしとるし  
とるしとるしとるしとるしとるし  
とるしとるしとるしとるしとるし  
とるしとるしとるしとるしとるし  
とるしとるしとるしとるしとるし  
とるしとるしとるしとるしとるし



左々のお撰物鼻のくくあうきね緒きく  
一皮をまわしあう結成のサハるる合  
又うう天官もあふ山居あうまうあう  
大ねお撰の奏しうりたせあうう結の  
乱ああ又サハるるを抜あううお撰と  
まうらうう結成せう神龜之年まう  
法由うるのうせう

寛文七年音重お撰と所成あう  
山家お撰洋ふ武と載う文成る果

八月

細

ハ部又ハ田おの経とたのう田實の  
秋穀の如熟ととあう  
禁中庵を粥櫃のうう洞進守小ね粥  
うううううううううううううう  
今せうううううううううううう  
うう有織あのはううう福り記も尾  
うう粥の事と載う







年々るりにゆけの武也(りるりゆけ)  
將軍也(ハナノ取) 志津も橋の取枝も橋の取  
才也(橋の取) 志津も橋の取枝も橋の取  
橋中(橋の取) 志津も橋の取枝も橋の取

上のゆれ立(河内) りるりゆけ  
酒と(志津) りるりゆけ  
就(りるり) りるりゆけ  
りるり

松別(りるり) りるりゆけ  
りるり りるりゆけ  
りるり りるりゆけ  
りるり りるりゆけ

年中故事要言曰我(りるり) りるりゆけ  
か(りるり) りるりゆけ  
中(りるり) りるりゆけ  
根(りるり) りるりゆけ  
り(りるり) りるりゆけ  
後(りるり) りるりゆけ











故を去りてはりありきありきとて  
とてはりてはりありき

山城守を物部日故と會らへるは千  
元正の年の所守養元元年 八月征夷  
の先ありて大隅日向あま乳逆を  
内裏より筑業守法の小幡宮に所  
誓言ありてはりありき  
神軍とてはりありてはりありて  
とてはりありてはりありてはりありて

八幡の法は流道ふ世度の合致  
教はありてはりありてはりありて  
神院ありてはりありてはりありて  
世はありてはりありてはりありて  
とてはりありてはりありてはりありて

十の次

はりありてはりありてはりありて  
玩の年ありてはりありてはりありて  
とてはりありてはりありてはりありて



今見之陰と曰ふ所の夢ありて人  
之儀の愛するもの妻宿ふあり  
之儀的授け

年中の筆要言曰得て和して其の  
月と業統し得ると何ゆふかといは  
心より好むと兼好法師は其の好む  
せよといふことありて其の妻宿  
ふの夢宿屋の夢ありて其の  
良書といは曰夢二十八宿の

日月の夢ありて其の夢ありて  
一夢ありて其の夢ありて其の  
其の夢ありて其の夢ありて其の  
夢ありて其の夢ありて其の夢あり  
日牛宿ありて其の夢ありて其の  
夢ありて其の夢ありて其の夢あり  
夢ありて其の夢ありて其の夢あり  
夢ありて其の夢ありて其の夢あり  
夢ありて其の夢ありて其の夢あり







予之月會

帝京景物略曰中秋家設月光位於月所出方向月供而拜則焚月光紙徹所供散家之人遍月餅月菓戚屬餽相報餅有徑二尺者女歸寧是曰必返其夫家曰團圓餅

月令廣義曰燕都士庶餽送月餅巧名異狀此方中秋餽遺月饌西瓜之屬名者月會

中義之觀濤 海之觀潮 伍子胥之祀 子胥之祀 八月之潮

月令廣義曰臨安志云吳王賜子胥死以其尸盛夷之革浮之江中子胥因流揚波依潮往來時見其朱旗白馬在潮頭者因立廟每歲中秋既望潮水極大杭人以旗鼓逐之曰祭潮神有弄潮之戲

十六日



とて大なる事なりとて申すに申すに申すに  
貴王はあまの御孫と申すに申すに申すに  
ありて

とて大なる事なりとて申すに申すに申すに  
貴王はあまの御孫と申すに申すに申すに  
ありて  
とて大なる事なりとて申すに申すに申すに  
貴王はあまの御孫と申すに申すに申すに  
ありて  
とて大なる事なりとて申すに申すに申すに  
貴王はあまの御孫と申すに申すに申すに  
ありて

とて大なる事なりとて申すに申すに申すに

とて大なる事なりとて申すに申すに申すに  
貴王はあまの御孫と申すに申すに申すに  
ありて  
とて大なる事なりとて申すに申すに申すに  
貴王はあまの御孫と申すに申すに申すに  
ありて  
とて大なる事なりとて申すに申すに申すに  
貴王はあまの御孫と申すに申すに申すに  
ありて  
とて大なる事なりとて申すに申すに申すに  
貴王はあまの御孫と申すに申すに申すに  
ありて



庭子のあけのめかちあしききるをいふ  
侍裏まゝ一列ふ庭子なきはむらあし  
院ま宮かゝしあひの使あしむけ  
まゝりか

釋奠

上丁のあひひらひの月一甲今  
けが不堂し〜武あつちへ禁中  
業を庭殿の内湯ま〜あ〜日家  
治すあ〜〜人〜あ〜

九月

九日

皇陽の使節よ〜九〜陽の教あ〜  
九〜の教あ〜はま〜〜皇陽〜  
ものせ〜

魏文帝與鍾繇書曰九為陽數而日  
月並應故曰皇九

人家あ〜〜綿衣〜中〜  
あ〜



詩豳風曰九月授衣

日令廣義曰霜降始寒而絜績之功亦成故授人以衣使禦寒

重陽宴

古之於中土重陽之宴何如今之重陽

建武年中中書曰重陽也

重陽也

重陽也

重陽也

同頭書曰重陽宴上古行幸于神泉苑  
乾臨閣賜宴謂之菊花宴見內裏式  
月令廣義曰一統賦重陽賜百官宴  
宣德二年御製詩賜胡尚書淡

菊の酒

菊の酒を飲ぶ處を

菊の酒を飲ぶ處を

菊の酒を飲ぶ處を

菊の酒を飲ぶ處を

菊の酒を飲ぶ處を







多々々々々々々々侍宴觀賜郡臣菊花  
詩序採故事於漢武則赤萸挿宮人  
之衣尋舊跡於魏文亦黃花助彭祖  
術下書の  
附令  
月令廣義曰仙書茱萸為辟邪翁菊  
花為延壽客

事類全書曰南陽郡鄆縣有耳谷水耳  
菴云其山上有大菊落水從山下流得  
其滋液谷中有三十餘家不復穿耳耳  
仰飲此水上壽百二三十其中年又七  
八十見應劭風俗通

登二

中善  
戲  
陽  
之



汝何之々々菊花之秋  
汝何之々々菊花之秋  
汝何之々々菊花之秋  
汝何之々々菊花之秋  
汝何之々々菊花之秋  
汝何之々々菊花之秋  
汝何之々々菊花之秋  
汝何之々々菊花之秋  
汝何之々々菊花之秋  
汝何之々々菊花之秋

續齊諧記曰汝南桓景隨費長房游  
學累年長房謂景曰九月九日汝家當有  
災厄急宜去令家人多作絳囊盛茱萸  
以繫臂登高飲菊花酒此禍可消景

如其言舉家登山夕還見鷄狗牛羊  
一時暴死長房聞之曰代之矣今世  
人每至九日登山飲菊花酒婦人帶  
茱萸萸衣

栗糕

國俗九月九日食栗糕  
肉之加合食之何菓之也  
栗糕

燕朝樂事曰重九日人家糜栗粉和糯米































定武年申の事日々にいふ事  
まゝの事いふ事いふ事

禁中の中ら年日星の事小解の事  
りいし事いふ事いふ事

事いふ事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事

尤長橋の事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事

いふ事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事

事いふ事いふ事いふ事  
事いふ事いふ事いふ事

又曰丹波の事いふ事いふ事  
事いふ事いふ事いふ事

事いふ事いふ事いふ事  
事いふ事いふ事いふ事

事いふ事いふ事いふ事  
事いふ事いふ事いふ事



うきこころのち〜とまの御  
ほろ〜はあ〜御前御  
時許〜とけ〜ま〜か  
海〜

祐月〜  
〜は〜

居家直忌日十月亥日食餅令人無  
病病〜法候〜餅と  
〜お給〜

東照宮の御〜の吉例〜  
柳言まの〜

〜氏神〜絶唐日矢口〜  
〜社と〜



折敷一枚盛餅三種 餅数九枚

右白餅三 餅長八寸廣三寸  
厚一寸下效之

中赤餅三 左黒餅三

少引折敷之取盛酒とす武家の友京

ゆく討とす討と負とす武

將の事不蹲踞しと先白餅とあり中赤

餅一つありおきり己と友の友おきり供

山池とあり 大山池中山池榊山池白縁池又  
山池籬池の池とあり

おのしとすの餅とあり〇目二口

食と 次は餅の次は友の席次不徹きふ

矢越とありす次は武家の酒盃とありと

お飲と元のたふ飯は有実多し

左様十三とありは年とあり 折敷の口供とありと

其の式はありと今武家の主枝の法

里餅とありとゆも叫多と

残菊宴

と折敷は十月の折菊の宴



谷と谷をさへいさへ古く菊と愛せし  
まふも山人松屋も菊と松らし  
まふも山人松屋も菊と松らし  
菊軒と九月たるとさるる山人  
己ぬれは菊のこゝ今と傳へる

山の傳

ち。或は十月法西とて松とて山の神入  
松と松は山人松屋も菊と松らし

斧斤以時入山林材木不可勝用也

注草木零落而後斧斤入焉

十月山傳とあり山松と入るる也

元

十のとり元の節とあり

元とあり十月とあり

十のとり元とあり

我もこの節とあり

山の傳

山の傳とあり



種々蛭子の命とある事有りし  
甲

十月

部

禁中々々近頃の事ニテ修教皇居御  
いづれも郁子の御実と云ふはむと  
考へて豊年と云ふは此の年と云ふ事  
下りの二貫文と云ふ事ニテ禁中々々  
行年皇居と云ふ事ニテ是も或は  
古代々々の事と云ふ事ニテ郁子  
つらき事ニテ實の御移居の事と云ふ事



本草綱目曰木蓮一名薜荔一名木饅  
頭時珍曰木蓮延樹木垣牆而生四時  
不凋厚葉堅強大干絡石不花而實  
實大如盃微似蓮蓬而稍長正如無花  
果之生者六七月實內空而紅八月後滿  
腹細子大如稗子一子一鬚其味微醯其  
殼虛軟烏小兒喜食之

初の子日禁中少くは是天とまう  
かたもこの内わくく張る弾せらる豆飯と  
たまはる海らるはるあうりこりり  
まはるはる長はる女婦凡し何  
まう。禁中年中行年。あうり  
くあうり。子まうり。星は飯と  
月あうり。まはるはるはるあうり  
まはるはるはるはるはる

子あうり  
初の子日禁中少くは是天とまう  
かたもこの内わくく張る弾せらる豆飯と  
たまはる海らるはるあうりこりり  
まはるはる長はる女婦凡し何  
まう。禁中年中行年。あうり  
くあうり。子まうり。星は飯と  
月あうり。まはるはるはるあうり  
まはるはるはるはるはる



八日

伊大焼より稲高より井とある遊居庵  
ありて鞠多きより神田保菜より下へ  
修るよりおのちおのち少くもあつた  
竜脚より古へ入りてや産火  
焼く神田の浦へも古くはあつた  
よきよきありて今もあつた  
すては産火のきり



世に

古師傳とていふ事なく赤豆粥を食す  
年朔の始に粥を食す赤豆粥と  
喫し疫病と信ふ云々此の如き事と  
亦傳へるや古く申す天台智者の  
時廿四日天台智者古師の志日あり敷山  
少く海よりす事於て外法ありて天台  
一字の古師志日の傳へる事廿四日と  
敷山の事と申す事あり粥と供せし

今中野寺の儀ありての儀の事と傳へ  
て年と傳へる儀ありて粥と供せし  
と伝へる事一陽事儀の時多し年朔の  
始に粥を食す事ありて粥と供せし  
月令廣義曰十一月三十日豆粥祭門古  
人以仲冬晦日煮赤豆作糜以祭門  
後世流傳故事乃於季冬廿五作豆  
數粥一說十一月望日祭門蓋煮赤豆  
粥祿也



冬至

中書<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>儀<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>の中<sup>ニ</sup>下<sup>ル</sup>儀<sup>ノ</sup>長<sup>ノ</sup>の儀<sup>ト</sup>  
あり<sup>テ</sup>そ<sup>ノ</sup>く<sup>ハ</sup>り<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>ト</sup>も<sup>ハ</sup>我<sup>ノ</sup>朝<sup>ニ</sup>も  
夏<sup>ノ</sup>ハ<sup>カ</sup>多<sup>ク</sup>舞<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>。今<sup>ノ</sup>日<sup>ハ</sup>終<sup>ル</sup>く<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>日<sup>ニ</sup>  
日<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>セ<sup>ク</sup>る<sup>ハ</sup>事<sup>ト</sup>と<sup>ハ</sup>儀<sup>ノ</sup>事<sup>ト</sup>一<sup>ニ</sup>線<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>セ<sup>ク</sup>と  
活<sup>ク</sup>よ<sup>ク</sup>い<sup>ハ</sup>知<sup>ル</sup>と<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>。そ<sup>ノ</sup>れ<sup>ハ</sup>長<sup>ク</sup>あ<sup>リ</sup>と  
い<sup>ハ</sup>は<sup>レ</sup>儀<sup>ノ</sup>事<sup>ト</sup>と<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>支<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>儀<sup>ト</sup>か  
後<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>儀<sup>ト</sup>の<sup>ノ</sup>儀<sup>ト</sup>

漢書曰冬至陽生<sup>ス</sup>君道長<sup>ス</sup>故<sup>ニ</sup>賀<sup>ス</sup>

熙朝樂事曰冬至謂之<sup>ハ</sup>亞<sup>ニ</sup>歲<sup>ニ</sup>官府民間  
各相慶賀<sup>ス</sup>一如<sup>ハ</sup>元<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>儀<sup>ト</sup>吳<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>最<sup>ニ</sup>盛<sup>ニ</sup>  
江家次第曰冬至宴會<sup>ス</sup>聖<sup>ノ</sup>武<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>龜<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>年<sup>ニ</sup>  
十一月巳丑天皇御大安殿受<sup>テ</sup>冬至<sup>ス</sup>  
賀<sup>ノ</sup>辭

歲時記曰晉魏間宮中以<sup>ハ</sup>紅<sup>ノ</sup>線<sup>ノ</sup>量<sup>リ</sup>日<sup>ノ</sup>影<sup>ト</sup>  
至<sup>ル</sup>後<sup>ノ</sup>日<sup>ハ</sup>漆<sup>ニ</sup>長<sup>ク</sup>一<sup>ニ</sup>線<sup>ト</sup>  
文昌雜錄曰唐宮中以<sup>ハ</sup>女<sup>ノ</sup>功<sup>ノ</sup>揆<sup>リ</sup>日<sup>ノ</sup>長<sup>ク</sup>短<sup>ク</sup>冬<sup>ノ</sup>  
至<sup>ル</sup>後<sup>ノ</sup>比<sup>テ</sup>常<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>增<sup>シ</sup>一<sup>ニ</sup>線<sup>ト</sup>之<sup>ノ</sup>功<sup>ト</sup>







送風

有穢虫此曰温糟粥ハサテ大ニシテ

酒不和〜〜〜物と〜一

温粥粥と書せる〜

俗家〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

月令廣義曰宋元是日都城以諸穀米

菜煮粥相饋謂祛寒卻疾曰臘八粥

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

十一

〜〜〜

〜〜〜

燒佛

〜〜〜











彼一疫と碎る詠るうらる

年忘

人あさく父母兄弟親屬と定むる寸一年の  
之事と移り意や中身とてと別歳  
との又後致しつ

月令廣義曰東坡集云蜀風俗晚歲  
相餽問謂之餽歲酒食相邀為別歲  
琅琊代醉編曰淮人歲暮家人宴集曰  
潑散

韋應物詩曰田婦有佳獻潑散新歲餘

とるを候

年の暮ふらん赤き布とてあつたひ  
度向とてと甚ふといふもよみ祝詞と  
いふ躍る古元の詠ふとてあつたひ  
院の正史とてあつたひとて祝詞と  
あつたひとてあつたひとて祝詞と

とる

年の四影とてあつたひとて祝詞と







その行末

いづのの格と軒よるも、格と霜  
枯るも、のの格と、魚の口  
挿し、月人の謂、まゝ、大難言、祭又元日  
祭、鰯、羊のまゝ、や、紀、昔、く、古、作、記  
も、元、日、の、り、ふ、か、う、の、み、さ、の、ま、ま、さ、う、り  
初、由、ら、申、古、く、六、高、と、牲、と、ま、ま、の、人  
魚、の、ま、ま、さ、う、り、の、み、さ、の、ま、ま、さ、う、り  
月、の、ま、ま、さ、う、り、信、州、正、倉、と、く、解、り、な  
ま、ま、さ、う、り、ま、ま、さ、う、り、考、知、く、



月令廣義曰正旦縣官懸羊磔鷄以羊嚙  
百草鷄啄中五穀殺之以助生氣也

### 追儺

抄中……文武天皇慶雲三年公始大  
舍人寮鬼面被了是能之戴了是衣  
赤袴……也……南宮左丞陸陽察  
多文之編上右……追儺之人柳のら蓮  
のた……対々……入……の……  
おげれ……

……

事文類聚曰昔顓頊氏有三子凶而為  
疫鬼一居江中為瘴鬼一居若水為  
罔兩螿鬼一居人宮室區隅中善驚  
小鬼為小鬼於是以前歲十一月命祀官  
時儺以索宮中而驅疫鬼焉東海  
度索山有神荼桀鬱壘之神以禦凶鬼  
為民除害因制驅儺之神季冬先臘  
一日選大儺侘子百二十人皆赤幘皂

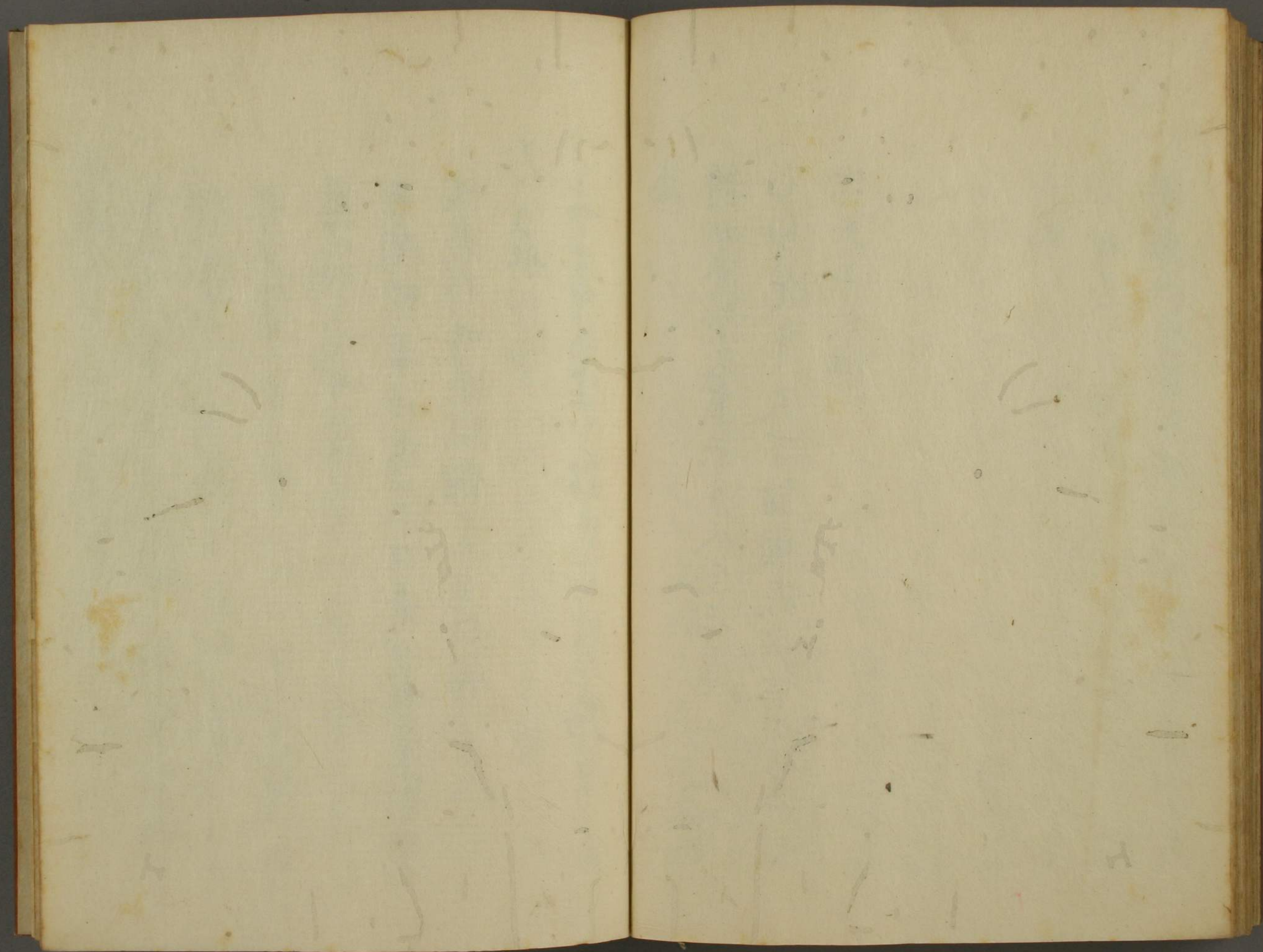


製執大鼉鼓方相氏黃金四目蒙熊皮  
玄衣朱裳衣執戈持盾牽百雜及童子而  
時儼以逐惡鬼于禁中黃門唱侏子和  
曰甲作食弘擘胃食虎雄伯食魅騰簡  
食不祥攬諸食必言伯奇食夢強梁祖明  
共食藥死寄生未女隨食觀錯浙食巨窮  
奇騰根共食蠱凡使十二神追惡凶赫  
女軀拉女軀節解女肉抽女肺腸女不  
急去後者為糧見山海經及後漢禮樂

志

續日本紀文武天皇大室三年十二月  
己卯是年天下諸國疫疾百姓多死始  
作土牛大儼















たしなむのりわつるあさよひのあはれ  
よ末のふと平とくすしりか

李元人日詩曰命駕升西山寓目眺原疇  
重加禮送<sup>て</sup>割<sup>て</sup>愈<sup>の</sup>禮<sup>事</sup>と<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>  
法人<sup>の</sup>礼<sup>と</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ぬ</sup>ふ<sup>こ</sup>し<sup>あ</sup>ら<sup>し</sup>め<sup>り</sup>  
言<sup>ひ</sup>け<sup>ら</sup>る<sup>ま</sup>す<sup>も</sup>○<sup>ま</sup>若<sup>く</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>し</sup>め<sup>り</sup>  
け<sup>ら</sup>る<sup>ま</sup>す<sup>も</sup>社<sup>の</sup>信<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>し</sup>め<sup>り</sup>  
あ<sup>ら</sup>ま<sup>し</sup>め<sup>り</sup>と<sup>ら</sup>ふ<sup>ま</sup>た<sup>と</sup>り<sup>い</sup>ひ<sup>お</sup>け<sup>り</sup>  
あ<sup>ら</sup>ま<sup>し</sup>め<sup>り</sup>

何れもあまのちをふかむし<sup>い</sup>の<sup>ま</sup>ま<sup>も</sup>く<sup>く</sup>  
法人の<sup>い</sup>ひ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>人の<sup>ま</sup>ま<sup>も</sup>く<sup>く</sup>  
あ<sup>ら</sup>ま<sup>し</sup>め<sup>り</sup>と<sup>ら</sup>ふ<sup>ま</sup>た<sup>と</sup>り<sup>い</sup>ひ<sup>お</sup>け<sup>り</sup>

紫暮

今日下句<sup>句</sup>新<sup>新</sup>歲<sup>歳</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>し</sup>め<sup>り</sup>  
思<sup>ひ</sup>の<sup>い</sup>ひ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>物<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>し</sup>め<sup>り</sup>  
あ<sup>ら</sup>ま<sup>し</sup>め<sup>り</sup>と<sup>ら</sup>ふ<sup>ま</sup>た<sup>と</sup>り<sup>い</sup>ひ<sup>お</sup>け<sup>り</sup>

風土記曰吳蜀風俗歲晚相與<sup>三</sup>醜<sup>謂</sup>之



餽歲

熙朝樂事曰僧道作六年疏仙未湯以  
送檀越醫人亦送屠蘇袋同心結及諸品  
湯劑於常所往來者上

五寶信義齋書



